福島潟自然情報

福島潟 生きもの探険 足跡やふんを追って推理しよう

潟先案内人の観察日記

このコーナーはビュー福島潟とNPO法人「ねっとわーく福島潟」で担当しています。

見られる場所：福島潟と周辺の水田・水路・自然学習園の雪上、底泥や土の上

冬の福島潟に出かけると、湿った土や雪の上に、さまざまな動物の足跡やふんが観察できます。生きものの生活のあとを示す、こういったしるしを生痕（せいこん）といいます。生痕にはこのほかにも、食べ残した食痕、巣のあと、つめあと、はいあと、ぬけた毛や羽などがあります。生痕をよく調べれば、姿の見えない生きものでも、生活の様子を知ることができます。

まず第一に、足跡なら、どんな生きものか考えてみましょう。そして急いでいたのか、ゆっくり歩いていたのか、敵に追われたのだろうか、途中で消えたのは、穴や木に逃げたのだろうか、鳥なら飛び立ったのだろうか。また、えさを食べていたのなら、食べ残しはないか、同じような跡がたくさんあれば仲間や家族なのか、さまざまな想像力を働かせ、楽しい生きもの探険をやってみましょう。

地面に落ちているふんをみたら、形や大きさなどからだいたいの見当をつけることは可能です。福島潟の獣（けもの）では、イタチ、タヌキ、ノウサギ、ノネズミなどのふんがみられます。自然学習園の池の周辺には、1月ころになるとたくさんの鳥のふんが見られます。コハクチョウ、オオヒシクイなどの大型のものが目立ちます。鳥のふんは臭いもきつくないので、持ち帰って、どんなものを食べているか調べるとおもしろいです。「ふーん：物好きもいるもんだ。」と笑われそうです。しかしこういった地道な調査によってオオヒシクイなどが毎年福島潟やその周辺にやってくるのに適する環境条件がわかり、保全するのに役立ちます。さあ、皆さんも探険し、推理してみませんか。

（ねっとわーく福島潟、潟先案内人　松木）

この２つは、何歳くらいの人の足跡でしょうか。
また女性か男性か。農村型か都会型か。形・大きさから推理してみましょう。
答えは26ページ欄外にあります。

町村合併と新町名

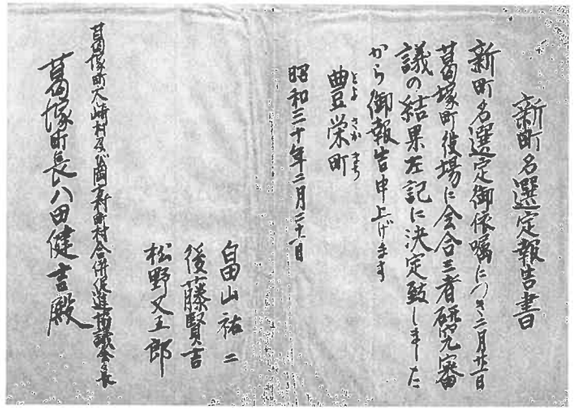
昭和29（１９５４）年10月11日、県町村合併促進審議会は葛塚町、長浦村、岡方村、木崎村の4カ町村合併案を公表しました。この日以来、町村合併へ向けての動きが活発となり、各町村代表の合併協議会が開催され、住民への広報や啓発活動も行われました。しかし、長浦村は昭和30年2月12日の村議会で、「長浦村の廃合について」を提案しましたが、反対多数で否決され合併参加を見送ることになりました。

この結果、町村合併促進協議会は、3月末日までに長浦村との合併は不可能と判断し、葛塚・岡方・木崎の3カ町村の合併後、長浦村との合併を交渉することと決定しました。2月14日、3カ町村の議会が招集され、それぞれの町村を廃止して、新たに「白新町（仮の町名）」を新設する議案を各議会とも満場一致で議決しました。

2月17日、2回目の合併協議会が開かれ、3カ町村対等合併という立場から、新しい町名を選定することが重要な問題となりました。葛塚町は「葛塚」を主張し、岡方村は中世の庄園名から「豊田」の案を出し木崎村は新興梨の本場ということから「新興」を提案しました。このほかに「平野」、「白新」などが挙げられましたが決まりませんでした。そこで各町村から町名選定委員1人ずつあげ、それに一切任せることとしました。

町名選定委員には、葛塚は松野又五郎氏、木崎は畠山佑二氏、岡方は後藤賢吉氏を推薦し、この3人で町名を選定することにしました。また合併推進協議会の町名案は採用しないとの約束があり、3人の委員は豊田の豊を生かして検討し、郷土が豊かにますます栄えるようにとの願いを込め「豊栄」という地名を選定しました。この結果は、各町村議会で議決され、3月31日新しい町「豊栄町」が誕生しました。

（郷土史研究家　鷲間）



新町名選定報告書

葛塚町役場に於て三月廿日
葛塚町役場に会合三者研究審議の結果左記に決定致しましたから御報告申上げます

豊栄町

昭和三十年三月三十一日

畠山祐二
後藤賢吉
松野又五郎

葛塚町長八田健吉殿

VOICE　みんなの声

市長への便りから

「ごみのポイ捨て対策について」

（葛塚地区　70代　男性）

毎年、福島潟クリーン作戦に大勢の方々が参加されていますが、ごみは減少しているのでしょうか。

また、市としてポイ捨て禁止看板や老人クラブなどの協力を得て、空き缶や空ビンの回収事業を実施していますが、いつまで継続するのか、お聞きします。

福島潟の自然環境を後世に残そうと始まった、福島潟クリーン作戦も今年で23回を数えました。

ごみの回収作業と併せて、不法投棄防止意識の醸成を図る目的で実施し、ごみの量は、左記のとおりです。

福島潟クリーン作戦ごみ回収量（t）

年度	可燃物	不燃物	計
元年	5.0	6.0	11.0
5	4.5	3.0	7.5
10	2.0	2.5	4.5
12	2.1	2.8	4.9
13	2.3	1.7	4.0
14	4.0	2.5	6.5

また、道端などに捨てられる空き缶や空きビンなどのポイ捨て対策として市は、「ポイ捨て禁止看板」の設置や市内全域を対象とした「空き缶ゼロ作戦」の実施および年間を通して老人クラブなどの協力を得ての「空き缶回収事業」に、取り組んでいます。

ポイ捨ては、個人のモラルの問題で、防止する決め手はありません。市としては、地道なごみの回収活動を実践しながら市民意識の高揚を図り、モラルの向上に努力をしていきます。

なお、平成13年3月に市民参画で、「豊栄市環境プラン」を作成しました。プランでは、環境改善は市民の具体的な実践行動が中心と位置付け、豊栄市環境プラン市民実践版」を全世帯に配布し、市民の皆さんの協力を呼びかけています。

また、地域の身近な問題や課題などに住民が自主的に取り組む「地域コミュニティ」が活発に活動しています。

このポイ捨て問題についても、コミュニティ活動として、身近な人たちで話し合ってみてはいかがでしょうか。

皆さんの声をお寄せください

「みんなの声」は、市民の皆さんのうれしいこと、悲しいこと、新聞を読んだりテレビを見たりして感じたこと、市に対する意見などの意見発表の場です。思いつくまま皆さんの声をお寄せください。投稿は、郵送（手紙・はがき）か電子メールで、住所、氏名、年齢、電話番号を明記の上お寄せください。

お寄せいただいた原稿は、紙面の都合などで、趣旨は変えずに内容を一部省略・変更することがあります。送り先は、広報紙裏表紙をご覧ください。

教育コラム　私の実践・提言

われら子育て応援隊！

保育グループ『えくぼ』
代表　佐藤　裕美

先日、興味深い新聞記事を読みました。「乳児子育て中の父母の78％以上が育児を負担に感じるときがある」という内容で、「自由な時間が持てない」というのが大きな理由の一つに挙げられていました。

思い起こせば2年前、中央公民館で「保育ヘルパー養成講座」を終えたばかりのメンバーが集まり手作りで立ち上げた『保育グループえくぼ』。「子育て応援隊として自分たちの子育て経験を生かし一助になれば…」という気持ちでしたが、いざ、実際に活動を始めてみると活動するたびに「本当に必要とされている活動」だと実感しました。いろいろな団体の皆さんに、私たちの活動をご理解いただき、広報おしらせ版にも「保育室付き」イベントが多く見られるようになり、また、保育室を利用された皆さんにも喜んでいただいています。多くの場合、保育室1回の利用時間は2時間程度ですが、乳幼児にとっては、大好きな両親と離れ、とてつもなく長く感じられるはず…。

また、両親にとっては自由だけれど心配な2時間です。その親子が再開したときの笑顔と笑顔…。お互いに何倍も大好きになって、両親はリフレッシュして『また子育て頑張ろう！』と一緒に帰っていく姿を見るとき、担当の保育ヘルパーにとっても一番うれしい瞬間です。

現在『保育室付き』のイベントは、講演会・講習会・音楽会などお勉強的内容の場合が多いのですが、「自由な時間が欲しい」という生の声に応えるならば、これからは、遊びや娯楽また趣味の教室こそ保育室を。

また、大きなイベントの時には予約なしでも安心して子どもを預けられ、誰でも休める休憩室を兼ねた保育室が必要なのではないかと思います。これからも『われら子育て応援隊！』初心を忘れず、活動を続けていきます。